

博士課程教育リーディングプログラム 平成25年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成25年度		
申請大学名	京都大学	申請大学長名	松本 紘
申請類型	オンリーワン型	プログラム責任者名	淡路 敏之
整理番号	U04	プログラムコーディネーター名	松沢 哲郎
プログラム名	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

霊長類学は日本から世界に向けて発信し日本が世界の第一線を保持してきた稀有な学問である。霊長類学を基盤にして、大型の絶滅危惧種を対象にした「ワイルドライフサイエンス」という新興の学問分野を確立しつつある。そこで必要とされているのは、フィールドワークを共通基盤として、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムといった本性全体の理解を深めつつ、「地球社会の調和ある共存」という京都大学の憲章が掲げる理念を実現する実践活動である。ワイルドライフすなわち生き物すべての生存の連環を科学する分野で、フィールドワークによって培った「知行合一」の精神によって、学問と実践をつなぐグローバルリーダーの人材育成がいまこそ求められている。霊長類学を基盤とした研究が学問の最先端を担っているながら、欧米にあって日本に明確に欠けているものが3つある。①生物保全の専門家として国際機関・NGO等で働く若手人材の養成、②博物館ならびに動物園・水族館等におけるキュレーター養成とフィールドミュージアムの実現、③一国まるごとを対象としたアウトリーチ活動すなわち長い歳月をかけて特定の国との結びつきを深める活動、である。その3つの欠陥を逆に将来の伸びしろと考えたい。研究のための研究ではない。学問・教育・実践の新しいニッチとして、国際機関やNGOで、博物館や動物園等で、そして諸外国において、日本の眼に見える貢献を果たす人材を育成したい。なお、日本は先進国で唯一、霊長類が住む国であり、近年、野生のクマ、シカ、カモシカ、ニホンザルが人とのあつれきを増加させ、各地で対策に追われている。このような実態を踏まえ、国内のワイルドライフに対して世界に誇れる管理体制の構築を行う人材の育成にも力点を置く。

2. プログラムの進捗状況

平成25年10月1日にプログラムが採択され発足した。京都大学で5つ目となるリーディング大学院である。「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」と称する。略称を英文の頭文字をとってPWSとした。オンリーワン型であり、日本の他の大学に類例のない、フィールドワークを基礎とするプログラムである。京都大学の3つの部局が推進の中核となった。霊長類研究所、野生動物研究センター、理学研究科生物科学専攻である。プログラム分担者は、文理連携が必須なので、京都大学という総合大学の特徴を活かして、学内他部局からも広く募った。また、学外からも外交官、地域行政、法曹、国際NGO、博物館などから人材を募り、3つの出口を明確に意識した体制を構築した。平成25年度のプログラムの進行状況は、大別して3つにまとめられる。①ホームページ（HP）を媒体とした情報の集約と連携体制の確立、②平成26年度からの履修生の募集に向けたプログラムの整備、③キックオフ・シンポジウムの開催と履修生の決定、である。以下に詳述する。

第1は、HPを媒体とした情報の集約と連携体制の確立である。いち早くHPを立ち上げた。<http://www.wildlife-science.org/>以後も順調に更新を重ねており、リーディング大学院の方針・運営状況・カリキュラム・成果について、対内外の広報を一元的に集約した。ホームページそのものが活動の要であり、リアルタイムに日々更新されるかたちにした。求心力を高める手法として、まずロゴを策定した。「丸に一文字」のエンブレムは、プログラム発祥の地である犬山市の紋章（旧藩の紋章）であり、もちろんオンリーワンを意味する。リーディング大学院としては珍しく憲章を制定した。人間とそれ以外の野生動物の共存をめざす「地球社会の調和ある共存」が目標であり、それは京都大学の憲章の理念を受け継いでいる。熟議を重ねて、アドミッションポリシーやディプロマポリシーも作った。審議経過を含めてすべてHPで公表している。審議としてユニークな点は、徹底したTV会議の多用とペーパーレス会議の実現である。多数の分担者が、犬山と京都、さらには熊本や幸島というフィールド拠点に分散している。そこで、月例の協議員会をTV会議で開催している。3元中継や4元中継になることもあるが、面談と同様の臨場感をもって審議でできている。また、森林資源の無駄遣いにならないよう紙を節約し、すべてPDFで書類を用意し、各自のポータブル端末からアクセスするものとした。さらには、これらすべてがHPのスタッフ専用の場所に挙げられているので、世界中のどこにいてもいつでも情報にアクセスできるようにした。要は、全員がフィールドワーカーであり、世界各地に飛び散るので、いつでもどこでも同じ情報にアクセスできるようにした。意思決定は、学内分担差は全員からなる月例の協議員会とし、その中枢として、ヘッドクォーター（HQ）制度をとった。コーディネーターを含む8名のHQがいて、諸事の運営を審議し、それを実現する事務組織をとって、PWS支援室を京都の野生動物センターに置いた。

第2は、平成26年度からの履修生の募集に向けたプログラムの整備である。まずカリキュラムの整備をおこない、日程を逐次HPに掲げた。プログラムの理念とめざすところを詳述して広報につとめた。また、26年度から実施するプログラムに向けての準備を行うため、理学研究科生物科学専攻霊長類学野生動物系の大学院生による海外研修や国内研修のプログラムを実施した。教職員についても実習の実践的体験をつみあげてもらった。具体的には熊本サンクチュアリ、幸島の野生ニホンザル施設、屋久島の野生のサルとシカの調査施設などである。国外では、アフリカ、中南米、インド・東南アジアという3つの熱帯林を中心とする野生動物のホットスポットでのフィールドワークを実施した。平成26年度からの履修生の実習に向けて、必須の教育研究体制を構築するよう努めた。なお、実習の目玉のひとつである妙高高原笹ヶ峰の京大山岳部ヒュッテの利用については、1年後の積雪期の実習の予備演習のために、安全安心を確保する手段として雪上車の利用を試みた。履修生を広く深く受け止める実習体制が整ったと思う。リーディング大学院を担う特定教員5名をはじめとする教職員の雇用を決定し、年度末に、プログラムが使用できる部屋が京都に4室6スパン、犬山に3室3スパン確保できその受け入れ整備を進めた。

第3は、キックオフ・シンポジウムの開催と履修生の決定である。3月6-7-8-9日に、公益財団法人国際高等研究所の支援を受けて、キックオフ・シンポジウムを同所において合宿形式でおこなった。15か国から150余名が参加した。なお、履修生の選抜試験もかねておこなった。結果として13名が希望し、12名が受験して9名が履修生として合格した。研究者と履修生が4日間に渡って交流を行うことによって、たいへん密度の濃い交流ができた。